「実業家」と「笑い」・「品性」の関係
－夏目漱石の小説を一視点として－

天野勝重*
amano@yu.ac.kr

<目次>

1. はじめに
2. 実業家のイメージについて
3. 雑誌に描かれた実業家のイメージの変遷
4. 漱石作品における『実業家』像
5. おわりに

主題語: 実業家(Business person)、笑い(Humor)、品格(Grace)、明治時代(Meiji Era)、夏目漱石(NatsumeSoseki)

1. はじめに

明治維新を大きなきっかけとして岩崎弥太郎[1)]、安田善次郎[2)]、大倉喜八郎[3)]、浅野総一郎[4)]といった「財閥」の創始者や、「財閥」こそ作らなかったが、明治の政財界に多大な影響を与えた渋沢栄一[5)]などが登場してくる。ただ、明治10年代は「実業家」よりも青年がなりたいものがあった。換言すれば、「国会開設」を大きな目標とした「自由民権運動」が起こり、「立身出世」して政治家になることこそが青年の野心をまずは満たすものであった。例えば『花柳春話』の

* 嶺南大学校 文科大学 日語日文學科 副教授

1) 岩崎弥太郎(1834-1885)：三菱財閥の創始者。藩船などの払い下げを受けて三菱商会を創立。明治政府の保護による独占的海運事業として発展した。(「デジタル大辞泉」)
2) 安田善次郎(1838-1921)：幕末の江戸で両替商安田商店を営んで成功し、維新後、安田銀行に改組、また生命保険・損害保険会社を創立し、金融資本中心の安田財閥を築いた。(「デジタル大辞泉」)
3) 大倉喜八郎(1837-1928)：江戸で乾物店・銃砲店を開業、明治6年(1873)に大倉組商会を創立。軍の御用商人として巨利を得、大倉財閥を形成した。(「デジタル大辞泉」)
4) 浅野総一郎(1848-1930)：渋沢栄一の助力を得て官営深川セメント工場の払い下げを受け、浅野セメントを設立。海運・炭鉱・造船など事業を多角化し、浅野財閥を築いた。(「デジタル大辞泉」)
5) 渋沢栄一(1840-1931)：一橋家に仕えて幕臣となり、パリ万国博覧会幕府使節団に加わって渡欧。維新後、大蔵省官吏を経て第一国立銀行を設立。各種の会社の設立に参画し、実業界の指導的役割を果たした。(「デジタル大辞泉」)

夫レ英國ノ公明正大ナルヤ萬國ノ欽慕スル所ニシテ宜ク才子ノ力ヲ顯ハシ功ヲ立ツベキノ國ナリ。入ツテハ廟堂ニ参議シテ國家ノ大政ヲ布クベク出テハ萬國ニ接シテ世界ノ強弱ヲ制スベク天下ノ大権此ヨリ盛ナルハナシ。此ヲ是レ眞ニ青雲ノ志ヲ得ルト云フ。唯ダ徒ヅラニ聲名ヲ貪ルガ如キハ之レヲ倨傲ト稱シ識者ノ悪ム所ナリ。而シテ眞箇タル青雲ノ志ヲ得レバ賢愚共ニ之ヲ敬愛セザルハナシ。　(第二十五章)[6]

には「青雲ノ志」という言葉が何回も出てくる。これは「廟堂ニ参議シテ國家ノ大政ヲ布クベク」という形で政治に関与することこそが一番重要なことであると述べているのであるが、ここに当時の青年たちは自分自身の将来を重ね、共感しながら読むことでベストセラーとなったのである。

また官員となることで国家の役に立ちたいという意識を持つ青年も多く、彼らの夢を叶える一つの手段として「早稲田専門学校」[7]や「明治法律学校」[8]などの「専門学校」、「法律学校」も相次いで設立された。

しかし、政治は薩長を中心とした藩閥によって主たる地位は押さえられ、官員への夢も、日本近代文学の嚆矢である二葉亭四迷『浮雲』(1887(明治20)年)において、主人公であるにもかかわらず、内海文三が官員を馘首されたところから小説が始まるように、青年たちは政界にも官界にも希望を見いだしづらくなっていた。

そこに三井や住友といった江戸時代から続く豪商ではない人々が成功を収めることで、青年の選択肢に「実業家」というものができたと考えられる[9]。

本稿では、こうして登場してきた「実業家」像のイメージが変化してきたこと、またその変化には「ユーモア」や「ウィット」といった「笑い」が重要な役割を果たしたことを、漱石の作品を具体例として扱うことで証明することを目的とする。

2. 実業家のイメージについて

明治20年代には実業家に対するイメージはあまり良いものではなかった。例えば三宅雪

6) エドワード=ジョージ=アール=リットン(Edward George Earle Lytton)作、織田純一郎訳(1878)『欧州奇事 / 花柳春話』
7) 1882年に政治経済学科、法律学科、理学科(1883年廃止)の3科と英語学科の4科で開校。現早稲田大学。
8) 1881年開校。現明治大学。
9) 岩崎は現在の高知県出身であるが、安田と浅野は富山県、渋沢は埼玉県、大倉は新潟県の出身である。

嶺の『真善美日本人』『偽醜悪日本人』といった一連の著書では、

> 実業といひ、殖産といひ、拝金の為め玉石を混同し、而して国民の品格を顧みざる有るは悪むべしと雖も、実業に注目するの流行必ずしも賀すべからずとせず。
>
> (『真善美日本人』)(傍線は引用者による。以下同じ。)[10]

> 概して論ずるに、不景気々々々の嗟声四方に喧しく、国力年を追ふて次第に衰弱に傾向するは、運通の利便一時に膨張し、而して運通の利便膨張したる丈け、運通すべき物品の算出せざるにあり。是に於てか気徒らに労れて前途頗る遠く、轉た悵然たるもの少からず。而して最も社会を傷へるは、彼の悪性の分子たる紳商の跋扈にあり。(中略)嗚呼紳商を抑制せざれば実業振興せず、実業振興せざれば、不景気挽回せず、不景気挽回するの策、茲にあり、国富を増すも策茲にあり、国権を伸ばすも策茲にあり。　(『偽悪醜日本人』)[11]

と実業家を紳商の代名詞として扱い、彼等の存在こそが「日本人の堅実な実業の発達を妨碍するのみでなく、一切社会の腐敗の根源となっている」[12]と雪嶺が考えていたことが窺えるし、「実業」という言葉の生みの親とされる福沢諭吉も『実業論』の中で以下のように述べている。

> 元来文明の実業法とて特に奇なるに非ず、其要を云へば、第一知識見聞を広くして内外の事情を詳にし、時勢の進退に注意して機会を空しうせざることなり。(中略)第二は気品を高尚にして約束を重んずることなり。約束の性質を云へば単に冷淡なる法律上の事にこそあれば、時としては徳義の範疇を脱し人を欺き人の虚に乗ずるの不義を犯しても違約の名を免かる可き場合なきにあらざれども、唯根性気品の賤しからざるものありて始めて実業家の約束と云ふ可きのみ。[13]

このように実業家に「品性」「気品」といったものを要求する思想家の発言自体は日清戦争以前から存在しており、それが日清戦争を経て実業の発展と共に、一層要求されるようになったと言える。そこには当然江戸時代にあった身分制度である「士農工商」、つまり商人を一段低く見る意識もまだ残っていたことも影響していたと考えられる。例えば樋口一葉

---

10) 政教社、1891年3月。引用は三宅雪嶺(1967)『明治文学全集33 三宅雪嶺集』筑摩書房、p.214による。
11) 政教社、1891年5月。引用は上掲書、p.230による。
12) 柳田泉「解題」上掲書、p.425
13) 博文館、1893年5月。引用は福沢諭吉(1966)『明治文学全集8 福沢諭吉集』筑摩書房、pp.139-140

の「日記」にも以下のような箇所がある。

> 此夜一同熱議　実業につかん事に決す　かねてよりおもはさりし事にもあらすいはゝ思ふ処なれとも母君なとのたゝ嘆きになけきて汝か志よわく立てたる心なきからかく成行ぬる事とせめ給ふ家財をうりたりとて実業につきたりとてこれに依りて我か心のうつろひぬるものならねと老たる人などはたゞものゝ表のみを見てやがてよしあしを定め給ふめり[14)]

一葉の日記で非常に有名な箇所であるが、ここからは、士族から没落して雑貨や駄菓子を売る身になった樋口家の煩悶や苦痛、「実業につく」ということが、いかに一葉の母にとって耐えがたく屈辱的なものと感じられているかがうかがえる。

その一方、日清戦争において日本は清国から多額の賠償金を得て、それをもとに産業を生糸や茶の生産といった軽工業から、製鉄のような重工業への転換を目指し、政商たちの重要度は更に増していく。またその影響で国内の流通も盛んになり、その結果、実業に携わる人材の確保が急務となり、1899(明治32)年2月7日に「実業学校令」が「高等学校令」「高等女学校令」など他の学校令と同時に公布されることとなる。これは「実業学校ハ工業農業商業等ノ実業ニ従事スル者ニ須要ナル教育ヲ為スヲ以テ目的トス(第一条)」と規定されるように、実業学校は「工業」「農業」「商業」を「実業」ととらえた上で、それらの職業に「須要ナル教育」を行うことを目的としたものであった。

この公布を受け実業学校が増加することによって、実業思想を持った若者が増加することで、大きな意識変革が起ることになる。別の言い方をすれば、明治10年代に主流として存在した「立身出世」思想に変わるものとして「実業思想」が出現してきたと言うこともできよう。

3．雑誌に描かれた実業家のイメージの変遷

こうした時代背景を受けて登場してくるのが雑誌「実業之日本」である。「実業之日本」は光岡威一郎が「帝国実業の発達振興を図る」ことを目的として「大日本実業学会」を創立し、そこから「実際問題攻究の機関」を目指して1897(明治30)年6月10日に創刊したおもに若年層

14)「日記」1893年6月29日。引用は樋口一葉(1972)「樋口一葉集」『明治文学全集』30、筑摩書房、p.260による。

を対象読者とした啓蒙系の実業雑誌である。

「実業之日本」は増田義一の編集によって成功したことで有名であるが、創刊者は光岡威一郎である。光岡は1890(明治23)年に東京専門学校に入り経済学を学び3年後に卒業、そのまま研究科に進む。ちなみにこの時増田義一も同じ研究科に進んでいる。

> 一八九五年四月一七日、日本は清国と講和条約を結んで、二億両(三億六千五百余万円)の賠償金を手に入れた。また、その頃、日本の資本主義は産業革命の緒に着いており、「帝国実業の発達振興を図る」担い手たちが続々と誕生しつつあった。そういう中にあって、『農科』『商科』の講義録の売れ行きぶりを見て、時代の流れを敏感に感じ取っていた光岡が、実業に関する「実際問題攻究の機関」をめざして雑誌『実業之日本』の発行に踏み切ったのは当然であったとも言える。かくして一八九七年六月一〇日、大日本実業学会を発行元として『実業之日本』創刊第一号が刊行された。15)

このようにして誕生した「実業之日本」は時代の流れに乗り、部数を伸ばしていくこととなった。

更に1902(明治35)年にはアメリカの鋼鉄王として名高いカーネギーの著書を抄訳した『実業の帝国』(原題"The Empire of Business")が実業之日本社から刊行され、ベストセラーになったことも実業家が注目される要因となっていく。

『実業の帝国』は「世の青年と富豪とに向て最も痛切なる七章を訳したるものなり」と「例言」にあるとおり、カーネギーの実業に対する姿勢や方針を原書から抄出したものであり、例えば「◎青年前途の警戒」として

> 実業家たるものゝ最も恐るべきは投機なり。余が知る所の者にして投機に関係せし人は今日皆失敗せり。独り其資産に於て破産したるのみならず其操行に於ても亦破産せり。蓋し投機に由りて富を保持したる例は殆んど之なきなり。投機者は窮して遂に死す。実例は至る処に之あり、惟ふに毎朝新聞紙を披きて先づ第一に取引所の模様に注視する人は其日の中に処理すべき事務を沈静に考慮する余地を有せず。其心神必ず散漫して心常に本業の安危成敗に繋る要点に集注せざるなり投機者は今日巨万の富を擁するも明日は必ず破産者となるべし。実業家は其事業に勉めて怠らず偶然の奇利を頼まずして唯其目的を貫徹するに必要なる組織を立て孜々として之を行ひたる結果其報酬を積みて大を為す。16)

---

15) 馬静(2006)『実業之日本社の研究 近代日本雑誌史研究への序章』平原社、pp.35-36
16) 小池靖一訳(1902)『実業之帝国』実業之日本社、pp.6-7

と傍線部にあるように投機は必ず失敗しひいては死に至ることが殆どであること、よって実業家である為には自分の「事業」を最優先で行うことを諭している。カーネギーについては雑誌「太陽」第5巻15号(1899(明治32)年7月5日)及び16号(同年7月20日)でも「秋南」の署名で「カーネギー氏の製鋼事業」という記事が見られ、そこでは、

> 本編はカーネギー氏著『最近五十年米国繁盛記』訳者高橋光威氏が渡米後同書を携へてカーネギー氏に会合し大に氏の優遇を受けたるを以て其好意に酬ゆる為め特にカ氏の企業を掲載したる近刊紐育ヘラルトを本館に寄せ其紹介を請はれたるものなり

という形で既にカーネギーの略伝が2回に分けて掲載されている。また実業家の精神的心構えについて言えば、例えば春陽堂から刊行されていた「学窓余談」という雑誌に掲載された記事で

> 此の秘訣談は、英人ブラツトが著述せる「ビジネス」と云ふ原書の大意を取りて、目下我が国の実業者の子弟に、可成適当するやう、且つ可成了解し易いやうに、彼れ是れ取捨折衷して、之を通俗演説体に翻案したものであります。其演説の事項は、原書に実業の原則と称してある、智識、健康、勉強、耐忍、経験、信用の六題でありまして、実業家の立身に有益なる教訓秘訣の要点は、皆な其の中に尽してあります。[17)]

と述べられていることなどから、『実業の帝国』に特に目新しいものがあったというよりは、1899(明治32年)を一つの出発点とした実業ブームの中で生れたベストセラーであったとも言える。

その上、その翌年の1900(明治33)年には先に挙げた渋沢栄一、古河市兵衛、浅野総一郎といった実業家・政商が叙爵され、単なる富裕層というだけではなく、社会的地位をも確立していく。こうしたことも実業家を憧れの対象として見る者が増加していくことに繋がるわけだが、この社会的地位の増進が同時に品性・気品といったものをも要求することになっていくのである。

例えば「太陽」においては1899(明治32)年早々に「実業家逸話」という形で当時の成功者達の逸話の連載が始まるが、そこには読者からの投稿募集として次のような文章があった。

---

17)　竹下康之(1899)「実業家立身秘訣談」『学窓余談』春陽堂

> 本号より掲載する実業家逸話は全国現在実業家中の富豪家が、一代にして巨富を為したる手がら話及其間の失策談を集めて之を編纂するものなれば、之に関する材料は左の規定に従ひ続々投寄を望む。18)

ここで注目すべきは、実業家の「成功談」は次世代の青年が成功するための「手引き」としてではなく、一種の「読み物」として成立しているということである。

それは実業家のイメージが単なる理想像だけでなく、先の引用に続いて「面白き逸話及愛嬌ある失策談」を求めるという文章があることからも明らかである。つまり、それまでにないもの、「面白く」「愛嬌ある」エピソードが実業家像に付与され、それらは彼等の品性・気品を担保するという形で文章化されていくこととなったのである。ではその付与されたものに何があるのかということであるが、まさに「実業の帝国」がベストセラーになり「実業家」のイメージが変化してきた時に、機を同じくして文壇に現れた夏目漱石の作品を具体例として考えていきたい。

4. 漱石作品における『実業家』像

夏目漱石の作品において「笑い」が重要な位置を占めることは間違いない。英文学の影響や落語をはじめとする江戸文芸の影響に関する先行研究も数多く、例えば『夏目漱石事典』では「戯画とパロディ」という項目で次のように述べられている。

> 表現としての戯画およびパロディがその内容とするものは滑稽ないし諷刺であり、それを媒介するものはおおむね笑いであるといえる。(中略)漱石の作物の総体が『文学論』等の方法的に確実な実践であったという事情は、『吾輩は猫である』などの戯画とパロディに充ちた作品においても変わりはなかったといえる。19)

漱石自身は『文学論』の中で「口合」(pun)と「頓才」(wit)についてそれぞれ説明した上で「pun」を「かく複雑の度を追ふて此種の連想を拡張すれば吾人はやがて一種のparodyに達するを得べし」20)と述べていることから、witよりもpunの方を評価しているようであるが、ここではと

---

18) 「太陽」第五巻 二号(1899年1月20日)
19) 加藤二郎「戯画とパロディ」三好行雄編、前掲書、p.124

りあえず漱石が「笑い」というものを論理化していく必要があると考えていた、ということを押さえておきたい。[21]

その上で漱石が『吾輩は猫である』において具体的な「笑い」を生み出す上で登場させた一人が「実業家」金田とその妻鼻子であることは、本稿のテーマを考えるときに重要である。

> やがて、金田夫人が寒月の縁談の件で現れて一波乱が起こる。彼女は実業家の妻だが、偉大な鼻の持ち主で尊大をきわめ、寒月が博士になったら娘の富子をやるという一言が実業家嫌いの主人を怒らせ、けんもほろろにあしらわれたことから、金田家の悪辣な嫌がらせがはじまった。金田邸に忍びこんだ吾輩の見聞によれば、金田夫妻の主人に対する敵意は相当なものである。義理をかく、人情をかく、恥をかくの三角主義を金儲けの秘訣と心得る俗物と、かれに輪をかけた驕慢な鼻高き女は、金力に恐れいらぬ苦沙弥を懲らしめるためにいろいろと画策する。[22]

このように記されているとおり、金田夫妻の娘富子の縁談相手として水島寒月が相応しいかどうか苦沙弥と迷亭が応対することをきっかけに両者の対立が始まっていくのであるが、作中で描かれる「実業家」像は大体以下のようなものである。

> 金田君は堂々たる実業家であるから固より熊坂長範の様に五尺三寸を振り廻す気遣はあるまいが、承る処によれば人を人と思はぬ病気があるさうである。　(四)

> 「僕は実業家は学校時代から大嫌だ。金さへ取れゝば何でもする、昔で云へば素町人だからな」と実業家を前に控えて太平楽を並べる。
> 「まさかーさう許りも云へんがね、少しは下品な所もあるのさ、兎に角金と情死をする覚悟でなければ遣り通せないからー所が其金と云ふ奴が曲者でー今もある実業家の所へ行つて聞いて来たんだが、金を作るにも三角術を使はなくちやいけないと云ふのさー義理をかく、人情をかく、恥をかく是で三角になるさうだ面白いぢやないかアハヽヽヽ」　(四)[23]

---

20) 『文学論』(大倉書店、1907年5月)。本文の引用は夏目漱石(1995)『漱石全集』第十四巻、岩波書店、p.306による。

21) 漱石文学をはじめとした明治期の「笑い」の研究については浦和男(2014)「日本における「笑い学」の黎明―明治期の「笑い」理論―」『笑い学研究』21が概略を示している。

22) 三好行雄「漱石作品事典」三好行雄編、前掲書、p.33

23) 「ホトトギス」第8巻4号(1905年1月)~第9巻11号(1906年8月)まで全11回。のち『我が輩ハ猫デアル』上・中・下(大倉書店・服部書店、1905年10月、1906年11月、1907年5月)として単行本化。引用は夏目漱石(1993)『漱石全集 第一巻』岩波書店、p.143、pp.161-162による。

また『坊ちゃん』においても

> 兄は実業家になるとか云つて頻りに英語を勉強して居た。元来女の様な性分でずるいから、仲がよくなかつた。　(一)[24]

という箇所があり、やはり「実業家」のイメージとして「ずるい」というものがあったことがうかがえる。

このように「実業家」を俗なものであり、低く見るというのは先に触れた『実業の帝国』においてカーネギーが「警戒」するように忠告したことと裏表の関係にあると言え、「実業家」イコール「下品」で「金と情死をする」ような人間だというイメージである。それが戯画化されることで「笑い」の対象になっていたということは、決して金田のイメージが当時の「実業家」イメージとかけ離れていなかったことの証明でもある。

これに対して『彼岸過迄』に登場する、同じく「実業家」の肩書きを持つ田口はどうであろうか。敬太郎が探偵として試されるようになった時、敬太郎は友人である須永やその母に田口の人となりを教えて貰うが、そこで田口が行ったいたずらについて幾つか紹介される。

> 須永の母は猶「あんな顔はして居りますが、見懸によらない実意のある剽軽者で御座いますから」と云つて一人で笑つた。　(「停留所」十二)

> 「田口は昔ある御茶屋へ行つて、姉さん此電気燈は熱り過ぎるね、もう少し暗くして御呉れと頼んだ事があるさうだ。(中略)おや／＼未だ旧式を使つてるね。見つともないぢゃないか、此所の家にも似合はないこつた。早く会社の方へ改良を申し込んで置くと可い。順番に直して呉れるから。と左も尤もらしい忠告を与へたので、下女もたう／＼真に受け出して、」
>
> 田口は其前へ坐り込んで、実は是々だと残らず自分の悪戯を話した上、「担いだ代りに今夜は僕が奢るよ」と笑ひながら云つたんだといふ。
> 「斯ういふ剽気た真似をする男なんで御座いますから」と須永の母も話した後で可笑しさうに笑つた。　(「停留所」十三」[25]

---

24) 「ホトトギス」第9巻第7号(1906年4月)、のち『鶉籠』(春陽堂、1907年1月)に収録。引用は夏目漱石(1994)『漱石全集　第二巻』岩波書店、p.252による。

25) 「東京朝日新聞」「大阪朝日新聞」1912年1月1日~4月29日、単行本は春陽堂、1912(大正元)年9月、引用は夏目漱石(1994)『漱石全集　第七巻』岩波書店、pp.70-72による。

こうした田口の描写を先に名前を挙げた渋沢栄一と比較して「ステロタイプ化された実業家イメージのもとに田口が捉えられていることが確認できよう」26)と論ずる研究もあるが、漱石作品の中での時間軸で考えると違った側面が見えてくる。つまりここでの田口の紹介のされ方は金田とは全く違うのである。傍線部にあるように「実意のある剽軽者」というのが田口の評価であり、東京帝国大学を卒業した敬太郎よりも明らかに深みのある人物として描かれている。ここに描かれた実業家像の差はいったいどこから生れてきたのであろうか。そのことを考える上で、漱石の人間関係を少し見てみたい。

漱石が「東京朝日新聞」に『満韓ところどころ』を連載する直前に掲載した文章に「満韓の文明」というものがあるが、そこには次のような記述が見られる。

> 此の度旅行して感心したのは、日本人は進取の気性に富んで居て、貧乏世帯ながら分相応に何処迄も発展して行くと云ふ事実と之に伴ふ経営者の気概であります。満韓を遊歴して見ると成程日本人は頼母しい国民だと云ふ気が起ります。
> (中略)
> もう一つ感心したことは、彼地で経営に従事してゐるものは皆熱心に其管理の事業に従事して、自己の挙げ得た成功に対して皆満足の態度を以て説明して呉れる事であります。(中略)
> 　皆夫々の方面に於て自分の意見が行はれて、行はれたものが日々に成功して行のみならず其成功に対する報酬が内地の倍以上に高価であるから、徒らに郷土病に罹るものゝ外は、男子決心の事業として安んじて其職を尽す気にならざるを得ないのだらうと思ひます。27)

これは「満州日々新聞」の依頼で行った講演を文章化したものであるが、傍線部に書かれているように、漱石は満州での労働者の「経営者の気概」に感心し、その結果彼等は自らの成功に対し満足した態度で説明してくれたと述べている。経営者イコール実業家と言い換えてよいならば、まずこうした名も無き実業家の志の高さに漱石は感じる所を得るのである。また『満韓の文明』には草稿が一部残されており、そこでは次のような感想を述べようとしていた。

> 大連滞在中旅順に行つて古戦争場も観て来ました。二〇三高地やら東鶏冠山の砲台やら戦利品陳列所やら色々見物しました。白仁長官だの佐藤警務総長の厚意で夫々当時戦争に従事した経

26) 田口律男・瀬崎圭二注釈(2005)『漱石文学全注釈10 彼岸過迄』若草書房、p.92
27) 『東京朝日新聞』1909年10月18日。引用は夏目漱石(1996)『漱石全集』第二十五巻、岩波書店、pp.368-369による。

> 験のある専門家を案内に付けて叮嚀に説明さして呉れました。就中河野海軍中佐が自分と一所に小蒸気で旅順の港内を残らず乗り廻して逐一話をして呉れたのは面白かつたです。
> 満鉄の経営ですか、是も中村総裁だの国沢副総裁だの其他の理事並びに秘書役諸君の特別な尽力で見られる所丈は見ました。書斎に坐つてゐる我々に取つては格別利益のある見物でした。大連を立つときには特別室に入れられました。
> (中略)
> 朝鮮でも友人が多いので大変な便宜を得ました。平生は要路に居て経営の任に当る友達から、別に金を借りる了見もないが、斯ふ云ふときに世話になると実際好い友達を有つて仕合せだと思ひます。[28]

こうした漱石の無邪気とも言える考えは当然批判されるべきであるし「安価な民族的自負が頭をもたげており、「悲酸な国民」の一人として肩身の狭い思いをしつつ、外発的開化の現状批判を展開した厭世思想家夏目漱石の発言とは、信じがたい乖離がある。全体の文脈からみて中村是公への友情からくるプロパガンダ的な要素が混じっていることも考えられなくもないものの、結果的には『満韓』の「無神経さ」の前触れであることに変わりはない。」[29]という記述からも、それが現在の漱石研究において一般的であることは、論者もよく理解している。しかし、実業家に対する描写が漱石の作品の中で変化していることもやはり事実であり、その変化のきっかけとして「満韓訪問」があったと考えることは可能であろう。

5. おわりに

漱石が「明治」という時代に対して、そしてそれを代表する政府や権力などに極めて懐疑的であったのは確かである。

> 自分は積んである薪を片つ端から彫つて見たが、どれもこれも仁王を蔵してゐるのはなかつた。遂に明治の木には到底仁王は埋つてゐないものだと悟つた。　(『夢十夜』第六夜)

『夢十夜』のこの箇所を引用した橋本治は続けて「これを書く夏目漱石にとって、明治の現

28) 夏目漱石(1996)『漱石全集』第二十五巻、岩波書店、pp.370-371
29) 三好行雄「漱石作品事典」三好行雄編、前掲書、p.246

在は産むべきものをなにも持たない「無」なのである。」と述べ、さらには

> 夏目漱石は、近代にやって来られた日本も、日本にやって来た西洋の近代も好きではない。英文学者になってしまった夏目漱石は、西洋の近代の中に自分の望むものなどなにもないことを知る。そもそも彼は、漢文学が好きな人間で、英文学の方に進んだのは、「それなら食っていける」というだけである。しかし、そう思う自分はいやな「日本の近代」の中に生きている。初めは、その近代のありようをからかって、『吾輩は猫である』とか『坊ちゃん』を書いていた。[30]

と分析する。ただ漱石自身は橋本の言うところの「からかい」つまりwitをあまり肯定的なものとして描いてはおらず、witの持つ都会性は「突飛な、執拗な、奇抜な、理を離れた、常識を飛び越した種類」のものであり、

> 漱石の中では、アディソンやスティールと、通人と、開化の先頭を走る都会人とは、ともに、常に自分が他人の目にどのように映るかを片時も忘れられない自意識の発達した人間という点で、強く結びついているのだ。
> (中略)
> そのような人間のあり方に対して、強い拒否感と葛藤があったようだ。自分自身も自覚心の強い都会人のひとりであるにもかかわらず、いや、だからこそ、そのような人間の姿を嫌悪する気持ちも人一倍強かった。[31]

と言及されているように、あらゆるものに対する懐疑と嫌悪こそが漱石文学の基点であると言えるのである。だからこそ「実業家」は漱石作品において「笑い」の対象になり得たのだが、本稿で明らかにしたように、明治30年代は同時に「実業家」に「品性」を要求した時代でもあった。そうした時代背景が漱石作品において実業家像を一時変更させる一因、つまり「笑われる」側から「笑い」を提供する側へと変わったのではないか。ただしこれも一時期だけの現象で、漱石作品での明治という時代に対する懐疑は形を変えて描かれていくことになる。

最後に、繰り返しになるが、『吾輩は猫である』での金田は他の作家の作品と同じく、批判の対象(笑われる者)として描かれているのに対し、『彼岸過迄』では、実業家自身に「笑い」を提供する内面が存在するようになっている。このように漱石作品において実業家の描か

---

30) 橋本治(2014)『失われた近代を求めてⅢ』朝日新聞出版、pp.233-234
31) 北川扶生子(2012)『漱石の文法』水声社、p.218

れ方に変化が現れているというのも、当時の実業家像が変遷したことの傍証となろう。

※ 全ての引用文に於てルビ・圏点・注釈番号に関しては省略した。

【参考文献】

「デジタル大字泉」(http://japanknowledge.com/)
北川扶生子(2012)『漱石の文法』水声社、p.218
田口律男・瀬崎圭二注釈(2005)『漱石文学全注釈10 彼岸過迄』若草書房、p.92
夏目漱石(1993)『漱石全集』第1巻、岩波書店、p.143、pp.161-162
_____(1994)『漱石全集』第2巻、岩波書店、p.252
_____(1994)『漱石全集』第7巻、岩波書店、pp.70-72
_____(1995)『漱石全集』第14巻、岩波書店、p.306
_____(1996)『漱石全集』第25巻、岩波書店、pp.370-371、pp.370-371
橋本治(2014)『失われた近代を求めてⅢ』朝日新聞出版、pp.233-234
樋口一葉(1972)「樋口一葉集」『明治文学全集』30、筑摩書房、p.260
福沢諭吉(1966)「福沢諭吉集」『明治文学全集』8、筑摩書房、pp.139-140
馬静(2006)「実業之日本社の研究 近代日本雑誌史研究への序章』平原社、pp.35-36
三宅雪嶺(1967)「三宅雪嶺集」『明治文学全集』33、筑摩書房、p.214、p.230
三好行雄編(1990)「夏目漱石事典」『別冊国文学』No.39、學燈社、pp.33-35、pp.124-125、p.246

논문투고일 : 2017년 03월 20일
심사개시일 : 2017년 04월 17일
1차 수정일 : 2017년 05월 07일
2차 수정일 : 2017년 05월 15일
게재확정일 : 2017년 05월 16일

〈要旨〉

『実業家』と『笑い』-『品性』の関係

－夏目漱石の小説を一視点として－

天野勝重

明治になって青年たちが目指すものは当初は政治家であり官僚になるという「立身出世」であったが、明治20年代には制度が固定化され、そのようなことは現実的ではなくなった。

そのかわりに新しく登場したのが「実業家」である。「財閥」をつくり、叙勲されるほどの社会的地位も獲得できるようになった彼等を目指す青年たちが現われてくる。

ここで、それまで気品や品性を重視してこなかった実業家像が大きな変化を起こし、実業家に品格を要請するようになる。そしてその品格を担保するのがウィットやユーモアといった「笑い」の要素なのである。

文学作品においてもそのことを読み取れる。例えば夏目漱石の『吾輩は猫である』と『彼岸過迄』を比較した時に、前者に登場する実業家は極めて人間性が低く、「笑われる」対象であったのに対し、後者はウィットやユーモアを解する人間として描かれている。

本稿ではこの実業家像の変化と笑いの関係について論じる。

Relationship between “business pereson” and “humor” “grace”

－Using Soseki’s work as an example－

Amano, Katsushige

In the Meiji era the aims of young people were initially politicians and became bureaucrats “Career advancement”, but in the Meiji 20s the system was fixed, such things became not realistic .

Instead, it was “a businessman” that appeared newly. Young people aiming at becoming able to acquire the social status to be decorated and making “zaibatsu” appear.

Here, the image of the businessmen who did not emphasize elegance and characterism so far caused a big change, so that business people will be asked for dignity. And it needs an element of “laugh” such as wit and humor to secure that dignity.

You can read about it in literary works as well. For example, when Natsume Soseki’s “I am a cat” is compared with “Higan sugimade”, business people who appear in the former are extremely low in humanity, while the latter is a human who understands wit and humor It is drawn.

In this paper we discuss the relationship between this change in businessman image and laughter.